

ハイデッガーにおける自然災害の問題

田鍋 良臣

昨年の震災は東北地方に甚大な被害をもたらした。われわれは今一度「自然」について、とりわけ「自然災害」という現象について熟考する必要性に迫られている。本発表はその手がかりとなりうるような論点を、ハイデッガーの思想から取り出した。

これまであまり注目されることはなかったが、ハイデッガーは『存在と時間』(一九二七年)のなかで、「自然災害」に関する言及を二回行っている。そのうち最も目につきやすいのは第七五節での指摘である。ハイデッガーはそこで、科学的な観察によつては捉えられない「世界―歴史的」な現象として、まさに「諸々の自然災害」を挙げている。これらは、道具の使用や他者とのかわりといった現存在の日常的なあり方の中で突然生起する。ハイデッガーはそこにこの現象のもつ「独自の性格」を見出すとともに、注目に値する「世界―歴史的な生起の存在論的構造」をも指摘するのだが、その説明はなされていない。

それを究明するため、本発表は次に『存在と時間』でなされた自然災害に関するもう一つの言及箇所注目する。それは「意味」を扱った第三二節である。ハイデッガーはそこで、意味に対する「不条理」なものの一例として、「突発する破壊的な自然の諸変事」を挙げている。その背景には、「意味を『もつ』のは現存在だけ」であり、非現存在的な存在者、物や道具などは原則的には「意味をもちえず」、その限りで「非意味的」で

あるという主張が存している。それを踏まえてハイデッガーは、自然災害を性格づける「不条理性」を、こうした「非意味性」の存在論的な様態の一つとみなすのである。それゆえここでの「不条理」とは、何か「馬鹿げている」といった価値評定ではなく、況やニヒリズムの表明でもなく、文字通りの意味で、人間が持つ「意味」に対して「反抗する(wider-sinnig)」という自然災害の動的な性格とみなすことができよう。こうした不条理の「反意味的な動性こそ、突発する自然災害の生起に独自の性格なのである。加えてハイデッガーの言う「意味」とは、現存在が自己の存在をそこへと「企投」する先のことであるから、自然災害の生起が「反意味的」であるなら、そこではいかなる企投も拒絶されざるをえない。要するに自然災害は、その本質上つねに「理解を絶したもの」として現出するのである。

だが「理解を絶する」のであれば、自然災害は一体いかなるものとしてわれわれに経験されるのだろうか。本発表はその手がかりを、一九三〇年前後の論考・講義のなかで繰り返し問題となった、「根源的な自然」に関する議論のうちに求める。ハイデッガーはこの「自然」を語る際に、しばしば古代ギリシアの「ピュシス」を引き合いに出す。ハイデッガーによれば、ピュシスとは動植物の成長、四季の移ろい、昼夜の交替、天体の運行、人間の運命さらには神々の動向など、およそ存在するものの全ての動性を司る「支配者」にあたる。その支配形態は「暴力」として具現化されるが、それは裏面から言えば、「人間がその独自の力を試し、挫折する」状況を意味する。ここに一層鋭く捉えられた自然災害に独自の「反意味的な性格を

見出すことができる。自然災害の生起は、つねに人間の営みに対抗する圧倒的な暴力の発露であり、その猛威は有意義な世界を破壊するとともに、そこに住み慣れ親しんだ環境の無力さをあらためて暴露する。けれども、そのなかに「すでに投げ入れられてしまっている」現存在は、そこから逃げ出すことができない。荒れ狂う自然の暴力に対するこの徹底的な無力さを、現存在は自らの有限性として、恐怖と不安の直中で引き受けざるをえないのである。それはつまり自然災害の開示が第一義的には、現存在の「被投性」のうちでなされることを意味する。あらゆる理解や解釈を拒絶しつつ「不条理」に生起する自然の暴力は、何よりもまず、われわれの存在の事實的な被投性において、その根本気分を通じて、直接的に経験されるのである。

第十二部会

キルケゴールにおける地域主義の問題

須藤 孝也

キルケゴールによれば、倫理が人間の内部に見出される真理であるのに対し、キリスト教は宣べ伝えられる真理であり、いわば人間の外部から人間にもたらされる真理である。そしてまたキルケゴールは、キリスト教の真理は信仰される対象であり、論証される類の真理ではないとした。少なくとも論証に着目する限りでは、キルケゴールのキリスト教は、普遍性から切り離されている。

キルケゴールは、キリスト教の真理性を証明することなく、もっぱら「真のキリスト者」の在り様を書くことで、デンマーク社会の宗教改革を成し遂げようとしたのだが、彼がそのような戦略を採りえたのは、デンマーク社会に住む人々は皆キリスト教徒であることを自負している、という認識があったためであった。また、確かにキルケゴールは当時のデンマーク国家教会が示したキリスト教についての理解を厳しく批判したけれど、これは彼のキリスト教理解が非デンマーク的であったことを意味しない。そのキリスト教理解はデンマークの思想文化と異質なものは全くなく、それはデンマークの文化的宗教的伝統の中でこそ醸成された、多分にデンマーク性ないし北欧性を帯びたものであった。

以上のように見るとき、キルケゴールは、哲学的にはドクサ